



Title	親密な異性関係における自己呈示に関する社会心理学的研究
Author(s)	谷口, 淳一
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47184
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	谷 口 淳 一
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）
学 位 記 番 号	第 20797 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	親密な異性関係における自己呈示に関する社会心理学的研究
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 大 坊 郁 夫 （副査） 教 授 日 野 林 俊 彦 教 授 釘 原 直 樹 教 授 足 立 浩 平

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、親密な異性関係における自己呈示に焦点をあて、異性との関係の親密さが自己呈示への動機づけに与える影響、及び自己呈示の対象となる親密な異性からどのような評価をされていると推測しているのかについて検討した。

恋愛関係や夫婦関係において「釣った魚には餌をやらない」という表現が用いられるように、一般的に人は、お互いによく知っていたり、仲が良い人よりも、初対面の他者やあまりよく知らない人に対して、自分がどのようなイメージを持たれているのかを気にしたり、積極的に自己呈示をしようとすると考えられている。そのような通説を反映してか、社会心理学分野における自己呈示研究において、これまで扱われてきたのは初対面の他者に対する自己呈示がほとんどであった。確かに、他者、とりわけ異性と親しくなるにつれて、さまざまなことを自己開示することによってお互いの理解が深まるため、積極的な自己呈示を行う必要がないと考えるようになるといえる。しかし、親密な異性と親密でない異性とでは、親密な異性の方が自分にとって重要な人物であることを考えれば、親密な異性からの評価もまた重要である。つまり、異性と親しくなっても自己呈示への動機づけが低下するわけではないとも考えることができる。

本研究では、異性と親密になるにつれて自己呈示への動機づけは低下するとの通説に対して、親密な異性に対しても自己呈示への動機づけは十分に高く、検討すべき研究テーマであるとの問題意識から 10 の研究を行った。

第 1 節 本論文の理論的背景

始めに、自己呈示についての先行研究を概観し、親密な異性に対する自己呈示についての研究は僅少であることを述べた。そして、継続的な関係にある異性との関係の親密さは自己呈示への動機づけの促進要因とも抑制要因ともなり得ることを説明した。その後、親密な関係に関するいくつかの理論を紹介し、親密な関係においてどのような自己評価を行うのかについての可能性を述べた。また、自己確証動機と自己高揚動機との理論的対立について述べ、親密な異性関係においてどのような自己呈示を行うのかについて、戦略的自己確証モデル（Swann *et al.*, 2002）の説明を行った。さらに、具体的な自己呈示行動として、化粧行動の説明を行った。

第2節 本論文の目的

親密な異性に対する自己呈示の検討において、本論文では、その異性との関係の親密さに着目した。関係の“重要性”と“安定性”を中心に、“関係の長さ”を含め、これまでの親密な関係（close relationship）に関する研究で扱われてきた複数の“親密さ”を取り上げて、親密な異性に対する自己呈示との関連を検討した。

また、本論文では、親密な異性からどのような評価を望み、親密な異性にどのような自己を呈示しようとするのかを明らかにしようとした。特に、親密な異性関係で行われる自己呈示では、自己認知とどのように折り合いをつけるかが問題であると考えた。そして、Bosson & Swann (2001) が提唱する戦略的自己確証モデルに基づき、恋人関係では自己確証的かつ自己高揚的な自己呈示を行っているとの仮説の検討を行った。また、親密な異性から実際にどのような評価をされていると推測しているのかにも着目し、恋人からは自己確証動機及び自己高揚動機を満たすような評価を得ていると推測することができているという仮説の検討を行った。

さらに本論文では、具体的な自己呈示行動として化粧行動を取り上げ、親密な異性に対する自己呈示についての研究結果が、化粧行動についても実際に確認されるのかについて検討し、親密な異性関係における自己呈示についてより具体的な知見を得ることを目指した。

第3節 関係の親密さが自己呈示動機に与える影響

関係の親密さが自己呈示動機に与える影響を検討するために、研究1～研究5を行った。

研究1では、親密な関係を求める自己呈示を調べる目的で、未知の女性と対面することを予期させられた男性被験者が、その女性の好みと被験者の自己概念が相反するという自己呈示ジレンマ状況において、どのような自己呈示方略をとるのかを、女性の魅力度と自己呈示する自己概念の重要度を操作して実験を行い、調べた。その結果、女性の魅力度によって自己呈示方略は変わらないものの、自己概念が自分にとってあまり重要ではない時、女性の好みに従った自己呈示が行われていることが分かった。また、自己呈示ジレンマ状況においては、女性の魅力度だけでなく将来の相互作用を期待できることが女性の好みに従った自己呈示を行うことに繋がる可能性が示唆された。

研究2～研究5では、自己呈示動機を促進する親密さの成分として“関係の重要性”と異性に対して感じる“魅力”、自己呈示動機を抑制する親密さの成分として“関係の安定性”を仮定して検討を行った。その結果、“関係の重要性”と異性に対して感じる“魅力”は仮定通り、自己呈示への動機づけを高め、さらに実際の自己呈示への行動を促していた。しかし、関係の“安定性”については、それぞれの研究で関係の“安定性”の下位次元として扱った指標によって、自己呈示への動機づけを抑制するものもあれば、自己呈示への動機づけを高めるものもあった。つまり、研究2～研究5の結果、異性との関係の親密さが自己呈示動機を促進する働きが示されたが、関係の親密さが自己呈示動機を抑制する働きについては明確には示されなかった。

第4節 個人差変数が自己呈示動機に影響

研究6では、初対面場面における自己呈示研究で扱われてきたパーソナリティ特性が、親密な異性に対する自己呈示動機にも影響を及ぼすかを検討した。その結果、パーソナリティ特性として、賞賛されたい欲求・拒否されたくない欲求、自尊感情、及びセルフモニタリングを取り上げたが、どれもが親密な異性に対する自己呈示への動機づけに影響を及ぼしていた。また、研究6では、恋人との親密さが低い群では、パーソナリティ特性が自己呈示動機と関連していたが、恋人との親密さが高い群では関連はみられなかった。このことから、恋人との親密さが高い人はパーソナリティ特性に関わらず自己呈示への動機づけが高いが、親密さが低い人は、その親密さの低さゆえに、自己呈示をすることで必ずしも恋人からポジティブな評価を得られるとは思えないために、パーソナリティ特性の影響を受けて自己呈示動機が高まることが示唆された。

第5節 自己認知および親密な異性からの評価の推測と自己呈示との関連

研究7と研究8では、継続的な異性関係において呈示される自己の内容に焦点をあてることで、自己認知とどのように折り合いをつけながら、親密な異性に対して自己呈示を行っているのか、また自己呈示の結果として親密な異性からどのような評価を得ていると推測しているのかについて検討を行った。研究7及び研究8の結果より、親密な異

性関係、特に恋人関係においては、自己確証動機と自己高揚動機とに折り合いをつけながら自己呈示を行っており、そのような自己呈示を通じて恋人からポジティブで正確な評価を得られていると推測することができ、自己確証動機及び自己高揚動機をともに満たすことができていることが示された。

第6節 親密な異性に対する化粧行動

研究9では、具体的な自己呈示行動として化粧行動を取り上げ、ここまでの親密な異性に対する自己呈示についての研究結果が、化粧行動についても実際に確認されるのかについて検討した。その結果、具体的な自己呈示行動として取り上げた化粧行動についても、概ね、研究2～研究8で行った研究結果と一致する結果が得られた。異性友人よりも恋人との相互作用場面において化粧行動を頻繁に行っており、外見的魅力の自己呈示への動機づけが高まることで、化粧行動が行われていた。また、恋人関係では、化粧した顔と素顔について恋人から独立した評価を得ていると推測しており、恋人に「親密性」を感じていることは化粧した顔について高い評価を得ているという推測に繋がるとの結果を得た。そして、化粧した顔への魅力について恋人から高い評価を得ていると推測するために、恋人関係においてのみ、化粧を入念に行うことが有効であることが示された。

第7節 総括

異性と親密になるにつれて自己呈示への動機づけは低下するとの通説に対して、本論文では親密な異性に対しても、特に恋人に対しては自己呈示への動機づけは十分に高いことが示された。ただし、初対面の異性に対する場合と継続的な関係にある異性に対する場合とでは自己呈示の目的や機能は異なると考えられる。初対面の異性や関係の初期の異性に対する自己呈示の目標は、その異性との関係を確立していくことであろう。他方、継続的な関係にある異性に対する自己呈示の目標は大きく分けて2つあると考えられる。第一に、継続的な関係にある異性との間に確立した関係を維持していくことである。第二に、継続的な関係にある異性からのポジティブ・フィードバックを得ることによって、自尊心を高揚させたり、維持することである。

本論文ではまた、親密な異性関係、特に恋人関係において、異性に対する自己呈示の動機づけが高まり、実際に自己呈示行動を行うことによって、異性からどのような評価を得ているかを推測するという一連のプロセスが適応的に機能していることが示された。特に恋人関係において親密であるほど、自己呈示はうまく機能していた。

以上のような本論文で明らかになった知見は、夫婦関係の維持の問題に寄与する可能性があり、また、青年期における対人関係と社会的・精神的適応との関連に関する議論に新たな示唆を与え、対人関係や社会的スキルトレーニングに有効なツールを提供しうると考えられる。

論文審査の結果の要旨

申請者は、親密な異性関係における自己呈示（他者が形成する自らの印象を統制しようと試みる）に焦点をあて、異性との関係の親密さが自己呈示への動機づけに与える影響、及び自己呈示の対象となる親密な異性からどのような評価をされていると推測しているのかについて組織的に検討し、論の展開をしている。関係の“重要性”と“安定性”を中心に、“関係の長さ”を含め、親密さは多元的な概念であること、呈示者自身の評価のみならず、親密な関係にある相手から受けている評価との照合をも試みていること、自己呈示相手との関係を踏まえていることなどに先進的な特徴がある。親密な異性に対しても自己呈示への動機づけは十分に高く、検討すべき研究テーマであるとの問題意識から多数の研究を行っている。

自己呈示には、自己確証動機と自己高揚動機があり、時に、それは拮抗した関係にあるとされることが一般的である。この論文では、戦略的自己確証モデルに基づき、恋人関係では自己確証的かつ自己高揚的な自己呈示を行っていると仮説の検討を行っている。

関係の親密さが自己呈示動機に与える影響を検討する研究（研究1～5）では、1)未知の女性と対面することを予期させられた男性参加者が、その女性の好みと参加者の自己概念が相反するという自己呈示ジレンマ状況において、

どのような自己呈示方略をとるのかを、女性の魅力度と自己呈示する自己概念の重要度を操作して実験を行い、2)自己呈示動機を促進する親密さの成分として、関係の重要性と異性に対して感じる魅力を、自己呈示動機を抑制する親密さの成分として関係の安定性をとりあげ、その効果について検討している。その結果、異性との関係の親密さが自己呈示動機を促進する働きが示されたが、関係の親密さが自己呈示動機を抑制する働きについては明確には示されなかった。

研究6では、個人変数の効果を検討し、賞賛されたい欲求・拒否されたくない欲求、自尊感情、及びセルフモニタリング、どれもが親密な異性に対する自己呈示への動機づけに影響を及ぼしていた。

研究7、8では、継続的な異性関係において呈示される自己の内容に焦点をあて、親密な異性関係、特に恋人関係においては、自己確証動機と自己高揚動機とに折り合いをつけながら自己呈示を行っており、そのような自己呈示を通じて恋人からポジティブで正確な評価を得られていると推測することができ、自己確証動機及び自己高揚動機とともに満たすことができていることが示された。

研究9では、自己呈示行動として化粧行動を取り上げ、ここまでの親密な異性に対する自己呈示についての研究結果が、化粧行動についても実際に確認されるのかについて検討し、異性友人よりも恋人との相互作用場面において化粧行動を頻繁に行っており、外見的魅力の自己呈示への動機づけが高まることで、化粧行動が行われることが知られている。

異性と親密になるにつれて自己呈示への動機づけは低下するとの見解に対して、本論文では親密な異性に対しても、自己呈示への動機づけは十分に高いことが示された。ただし、初対面の異性に対する場合と継続的な関係にある異性に対する場合とでは自己呈示の目的や機能は異なると考えられる。初対面の異性や関係の初期の異性に対する自己呈示の目標は、その異性との関係を確立していくことにある。他方、継続的な関係にある異性に対する自己呈示の目標は大きく分けて2つある。第一に、継続的な関係にある異性との間に確立した関係を維持していくこと、第二に、継続的な関係にある異性からのポジティブ・フィードバックを得ることによって、自尊心を高揚、維持することである。

本論文ではまた、親密な異性関係、特に恋人関係において、異性に対する自己呈示の動機づけが高まり、実際に自己呈示行動を行うことによって、異性からどのような評価を得ているかを推測するという一連のプロセスが適応的に機能していることが示された。特に恋人関係において親密であるほど、自己呈示はうまく機能していた。

これらの成果から、申請者は、関係の重要性（接触頻度、関係継続動機等）、安定性（関係の期間、相手の関係継続動機の推測）、個人要因（恋愛感情、情熱、親密さ）等が自己呈示動機を促進し、また、関係の安定性（関係の期間、相手の関係による排他性、メールによるコミュニケーションが少ないなど）は自己呈示動機を抑制する働きがあるという、関係の安定性の持つ二重の自己呈示効果がモデル化されている。さらに、関係の重要性、安定性がどのようなパスを通して関係の維持、自尊心維持・効用に至るのかについてのモデルをも提案しており、対人関係における自己の社会的作用について貴重な提案を行っていることの貢献は大であると評価できる。

本論文の研究成果・考察は説得力のあるものであり、得られた成果および申請者の研究への取り組みから、今後の更なる研究展開が十分に期待されるものと考えられる。

多様な研究の展開、理論的統合の調和のとれた本論文は、博士（人間科学）の学位授与に十分に値するものであると判定された。